

「輝く祖母」

室蘭市立東明中学校 3年

松田 紗詠子

母方の祖母は今年で八十歳だ。元気かなと電話すると、いつも出ない。「ああ、またご近所麻雀に行っているんだね」と、電話に出ないのに家族で安心している。

祖母は十八年前に祖父を亡くしてから、ずっと札幌で一人暮らしだ。とてもおしゃべりで、友達がたくさんいる。老人クラブの副会長をしていて、東日本大震災のときには、皆で貴重品を入れる巾着を縫って現地に送っていた。毎日きちんご飯を作って、きちんと食べている。多めにできた料理や、庭でとれた野菜をご近所に配っている。一人暮らしだから、家には話しかける人がいない。祖母の家に遊びに行くと、待ってましたとばかりに弾丸のように日頃の出来事を皆にしゃべる。私は、嬉しそうに話す祖母の顔が大好きだ。

今年の六月に、一人暮らしだった叔父が亡くなった。祖母の大切な息子だ。私は信じられなかった。家で倒れていたそうだ。父、母、祖母は急いで東京へ飛び、警察や病院に行ったり、大変だった。私たちもお葬式に行った。斎場に着くと、祖母と久しぶりに会った。疲れている様子だったが、私たちの前では冗談を言ったりして明るかった。告別式の最後のお別れの時、祖母は今まで溜めこんでいた分泣いた。祖母の涙を見るのは初めてだった。

八月、四十九日の納骨をすませ、祖母はいつもの元気な祖母に戻っていた。どんなに悲しかっただろう、どんなに苦しかっただろう。祖母は乗りこえたのだろうか。私は笑っている祖母を見てそう思った。帰り際に「さえ、バイバイ。体に気をつけるんだよ、頑張らなくていいからねえ、もう十分頑張ってるもんねえ。」と、初めての体験や夏期講習、部活でいっぱいになっている私に言ってくれた。その言葉で、詰めこんでいた心から重い荷物が降りて、楽になった。私は祖母の何げない一言から力をもらうことが多い。祖母にはそういう力がある。そんな祖母の元にはいつも多くの友人達が集っている。

人の輝きは千差万別だ。祖母は、人と繋がることで輝いていると思う。スポットライトの下のキラキラした輝きではない。毎日友達と麻雀したり、おしゃべりしたり、けんかしたり。そんな日常の中でいぶし銀の様に輝いている祖母は素敵だと思う。その輝きを通して大きな悲しみが小さくなっていけばいい。

祖母には、ずっと自分色に輝いてほしい。そして、五年後の私の成人式で親子三代で着物を着て元気に笑ってほしい。